

アスペルガー障害の芸術的創造性

——ヘンリー・ダーガーの精神分析的理解——

木 部 則 雄

要約：アウトサイダー・アートの代表的な画家であるヘンリー・ダーガーとその作品「非現実の王国」について精神分析的考察を行なった。ダーガーは幼児期より知的機能は高かったが、奇行などによって集団不適応を起こし、知的障害者施設に入所させられた。その後、その施設を脱走し、病院の掃除夫として生計を立て、他者とほとんど接触することのない孤高の人生を送った。ダーガーの生育歴、生活歴、映画『非現実の王国で ヘンリー・ダーガーの謎』の中のダーガーの隣人たちの証言から、ダーガーは臨床的なアスペルガー障害と診断できることを論じた。精神分析的見地によれば、アスペルガー障害、自閉症の心性は母親との心理的な分離を感知することができず、必然的に一人の人間としてしての同一性の基盤を確立できず、存在そのものが脅威に晒されている状態と理解されている。さらに、この心性は乳幼児期からの対人関係を阻害し、その結果、攻撃性が洗練化されず、性に関する混乱を来す要因となっている。本論では、乳幼児から成人までのアスペルガー障害、自閉症の心的発達の停止あるいは不全を「自閉症心性」として総括して論じた。「非現実の王国」はダーガーが施設に収容されていた時のトラウマを基に作成されている。この物語は子どもの解放が主題であるが、幼児期のトラウマ体験の反復強迫的な想起を表現していると考えられた。し

かし、この物語の結論が成立していないことを勘案すれば、ダーガーが幼児期のトラウマから解放されていなかったことを示唆していると考えられた。この物語の主人公であるヴィヴィアン・ガールズにペニスがあることは、自閉症心性の一部の特徴である母親との一体化、それによる性同一性の障害がダーガーの精神病理の基盤にあると推測された。さらに、執拗な嬰兒殺戮の描写は生々しい攻撃性の発露の表現であり、それは倒錯的な小児愛の世界で展開された「自閉症心性」の影響が示唆された。ダーガーの芸術性は従来の精神分析の見解による昇華や修復といった心的機制では説明できず、神という絶対者の存在に関する哲学的思索であり、アスペルガー障害の芸術的創造性の特徴と結論した。

キーワード：ヘンリー・ダーガー，アスペルガー障害，芸術的創造性，自閉症心性、性同一性障害，小児愛

．はじめに

ヘンリー・ダーガー (Henry Darger) はアウトサイド・アートの代表的な画家である。アウトサイダー・アート¹⁾は正規の芸術の教育を受けていない画家などの芸術家の作品、特に精神疾患を患った素人の作品の芸術である。20世紀の前半、シュールレアリストの芸術家たちが最初に、こうした作品に関心を抱いた。その後、フランス人画家のジャン・デュビュッフェ (Jean Dubuffet) はスイスの精神科医を中心に依頼して、患者たちの作品を収集し始めた。デュビュッフェはヨーロッパ各地を回り、作品を収集し、その芸術を「アール・ブリュット (Art Brut)」と新たな用語で命名した。現在のブームは1992年にロサンゼルスで開催された「パラレル・ヴィジョン——20世紀の美術とアウトサイド・アート」に端を発し、現在

に至っている。このブームの火付け役となったダーガーは挿入画入りの長編物語「非現実の王国」の作者である。さらに、ジェシカ・ユー監督によるドキュメンタリー映画『非現実の王国で ヘンリー・ダーガーの謎』²⁾は、ダーガーの人生とその作品が織り成す世界を描写している。この映画は生前のダーガーを知る人物へのインタビューと本人の自伝と絵画を組み合わせながら、非現実の王国に生きたダーガーの精神世界を見事に描いている。ダーガーは自分の作品を誰に見せるつもりもなく半世紀以上、自分の空想世界を作品として書き続けた。ダーガーの大家であるネイサン・ラーナー (Nathan Lerner) が死の直前にそれを発見し、ダーガーの死後に発表した。

・ ダーガーの生涯と作品

ジョン・M. マグレガー (John M. MacGregor) (著)、小出由紀子 (翻訳) 『ヘンリー・ダーガー 非現実の王国で (In the Realms of the Unreal)』³⁾を主に参照、引用しながら、生涯と作品を紹介する。

マグレガー⁴⁾は精神障害者の芸術に関する専門家であり、精神分析の正式な訓練も受けている。

1. ダーガーの生涯

ダーガーは1892年4月12日シカゴで生まれたが、母親はダーガーが4歳になる直前、妹の出産後に亡くなり、妹は里子に出された。ダーガーはその後妹の消息を一切知らなかった。その後、ダーガーは足の不自由な洋服の仕立て屋であった父親に育てられた。知的関心が高く、小学校入学前から新聞を読むことができ、小学校1年から3年に飛び級をした。しかし、8歳時に父親が体調を崩し聖アウグスチヌス救貧院に入所したが、友達とコミュニケーションがうまくとれず、退所させられた。この当時、口や喉を鳴らして、奇妙な音を立て他児から嫌われた。ダーガーの自伝によれば、

皆が嫌がれば嫌がるほどこの音を鳴らし、しばしば喧嘩になったという。12歳の頃、おそらく精神科の病院に連れていかれ、イリノイ知的障害児の施設に措置された。知的障害がないにも関わらず施設に入所させられたことは、明確なコミュニケーションの障害が認められたためであろう。この当時、自閉症の概念は確立しておらず、しばしば自閉症児は知的障害施設に入所していたことが知られている。15歳の時、ダーガーは父親が亡くなったことをこの施設で知った。ダーガーは何度か施設からの脱走を試み、16歳時に脱走に成功し、ようやく自由の身になることができた。当時繁栄を欲しい儘にしていたシカゴに戻り、聖ジョゼフ病院の掃除人として働き始めた。1909年、17歳の時「非現実の王国で」の執筆を開始し、この執筆はダーガーの死の半年前まで続けられた。1917年、25歳の時に第一次世界大戦に徴兵されたが、目が悪いことを大げさに演じて、除隊し、元の職に復職した。33歳の時から、教会に養子をたびたび申請するが却下された。ダーガーは毎日、教会に通い、最前列に座り、聖体拝領を頂いていた。ダーガーはベッドで寝ることなく、睡眠時間を削って、「非現実の王国で」を執筆し続けた。隣人の証言によれば、ダーガーはよく独り言を多彩な声で発し、それはあたかも複数の人が喋っているかのように聞こえたという。1953年から10年間、詳細な天候日誌をつけ始め、自分の予想と天気予報士の予想を比較した。73歳に老齢のために退職させられるまで、いくつかの職場を転々としたが、同じ清掃の仕事を淡々と続けた。その後、自伝『私の人生の歴史』を執筆する。1972年の暮れ、病気のために父親の亡くなった救貧院に入所した。その後、アパートの大家であるネイサン・ラーナーがダーガーの部屋に入り、その作品を発見して驚嘆した。ネイサン・ラーナーはシカゴ・パウハウスの一員である写真家であり、そこで芸術の教鞭も取っていた。そのために、ラーナーは芸術に造詣が深く、ダーガーの作品を一目見ただけで、素晴らしさを理解した。その作品は300枚の挿絵と1万5,000

頁以上の文章から構成されていた。ラーナーがその作品について尋ねた時にも、ダーガーは物語の存在を明かさず処分を希望したとされている。1973年4月13日、父親の亡くなった同じ救貧院で81歳の生涯を閉じた。ラーナー夫妻はダーガーの死後も2000年まで部屋をそのままの状態で保存した⁵⁾。ダーガーの部屋は現在、移設された場所で博物館として物語の原文と絵画と共に公開されている。

2. 「非現実の王国で」について

「非現実の王国で」は、正式には『非現実の王国として知られる地における、ヴィヴィアン・ガールズの話、子供奴隷の反乱に起因するグランデコ・アンジェリニアン戦争の嵐の話 (The Story of the Vivian Girls, in What is Known as the Realms of the Unreal, of the Glandeco-Angelinnian War Storm, Caused by the Child Slave Rebellion)』である。これはアウトサイダー・アートの代表例とされる作品であり、世界一長い長編小説と言われる。物語の抜粋は『ヘンリー・ダーガー 非現実の王国で』に収録されている。ダーガーは物語をタイピングされた15冊の冊子とし、最初の7冊に自身の手で装丁、製本を施していた。また、ダーガーは物語の完成後も、同じヴィヴィアン・ガールズを主人公とした続編『シカゴにおけるさらなる冒険 (Further Adventures in Chicago)』を1939年から執筆した。これも8,500頁に及ぶ長編作品であり、原稿は手書きのまま残されている。

この物語は子ども奴隷制を持つ軍事国家である「グランデリニア」と、「アビエニア」とよばれるカソリック国家との戦争を描いた長編小説である。アビエニアを率いる7人の美少女戦士、ヴィヴィアン・ガールズと呼ばれる姉妹が主人公である。ヴィヴィアン・ガールズについてのダーガーの記述は「彼女たちの美しさは言葉にできない。しかし彼女たちの性格と

行い、徳と魂は、さらに可憐で一点の染みもなかった。言われたことはいつでも進んでやり、悪い連中から身を遠ざけ、毎日ミサと聖体拝領に出かけ、小さな聖人のように暮らしている」との役割を与えられている。ヴィヴィアン・ガールズは何度も敵に捕まるが勇気と機転で抜け出し最後には勝利する。しかし、この小説の随所に「グランデリニア」の人々の子どもへの殺戮など残酷な場面の描写が認められる。その理由はダーガーの生活で起きた事件に関連している。

1912年、ダーガーは一枚の現実に殺された少女の新聞に掲載された写真を紛失してしまう。ダーガーが「アニー・アーロンバーグ」と名付けたこの子どもの写真が手元に戻るように神に祈り始める。しかし、数ヶ月経っても写真はダーガーの手元に返ることなく、ダーガーは神への怒り心頭で「グランデリニア」を勝利させると宣言し、子どもの大量殺戮の描写となった。そこには、首を絞められたり、吊るされたり、火炙りにされたり、内臓を引き出された少女たちが描かれている。こうした殺戮の描写の一方、ダーガーは子ども奴隷の救世主となるブレンゲンと呼ばれる異様な動物たちを創案した。ブレンゲンたちの特徴は子どもをこよなく愛し、子どもを傷つける人を憎悪していることであった。この戦いの永劫回遊的な展開の新たなマテリアルとなり、時に戦禍に加わり、物語はより混沌とした様相に展開する。この小説の顛末はふたつ用意されているが、これは同時に顛末がないとも言える。まず、アドビニア軍のエヴァンス将軍に率いられたアドビニア軍は宿敵であるマンレイを追い詰めた。そしてマンレイは投降し、ヴィヴィアン皇帝の前で自らの行為を悔いたという結末であった。しかし、次の頁にはまったく逆の想定が記されていた。エヴァンス将軍が攻めたが、マンレイに逆に攻撃され悲惨な大敗北をしたというものである。また、この小説の中で、ダーガーの役割はアビエニア軍の将軍、新聞の特派員、時に敵の一員となることもあり、一定していない。

300枚を超える挿絵は、物語の完成後に全てダーガーの手によって描かれている。ダーガーは絵画で世間の注目を浴びたが、ダーガーが長編小説を書くことから始めたことを勘案すれば、世間の評価と異なりダーガーの言語能力は視覚能力よりも卓越していたことを示している。絵画の多くは物語の一場面を描いた通常の挿絵であるが、中には物語に該当する箇所が見つからない挿画独自のシーンも描かれていると言われている。美術教育を受けなかったダーガーは挿絵を付ける際に、ゴミ捨て場などから拾った新聞・雑誌・広告などからの切り抜きを多用した。技法の中心は新聞・広告の写真や絵のトレースに、自分で子どもの時から得意だった塗り絵のように色付けしたものだった。さらに、コラージュの技法を用いたが、現実味を帯びすぎたためか、これは途中で放棄している。その後、新聞の連載漫画の「リトル・アニー・ルーシ」を幾度となくトレースしている。この連載漫画の少女こそ、まさしくヴィヴィアン・ガールズの一人になっている。この少女はさらに修正されて、ヴィヴィアン・ガールズの姉妹となり、ダーガーの「非現実の王国」の主人公になっている。1944年から、ダーガーは当時、とても高価であった写真の引き伸ばしによって、トレースでは出来なかった大小を自由に創り上げることが出来るようになった。この技術によって、ダーガーはコラージュ＝ドローイング技法を完成させ、あらゆるダーガーのイメージは変幻自在に表現されることが可能になった。絵画の主題はヴィヴィアン・ガールズの冒険であるが、少女たちはしばしば裸で描かれ、小児殺戮などの残虐な拷問や殺戮の対象となっている。また少女たちに小さなペニスも描かれていることも、顕著な不可解な特徴となっている。

3. ダーガーの人柄

ダーガーの人柄については、ジェシカ・ユー監督の映画『非現実の王国

で『ヘンリー・ダーガーの謎』²⁾の記述を引用しながら、説明する。本映画は実際にダーガーを知っている隣人たちのダーガーに関する発言と「非現実の王国」のアニメーションで構成されている。

隣人たちはダーガーについて「影の薄い、普通の貧しい老人」「ひどいひきこもりで自分の世界に生きていた。自分だけの小さな世界に生きていた」「変な人、おかしな人」「人と話すのが苦手だった」「周囲の人やものとまったく関係の築けない人」「目を逸らして通り過ぎた」「他人を意識することを恐れていた」「ほっといてくれ」「天候の話しかしたことがない」「周囲のことにすべて無頓着だった」と口々に語っている。ダーガーは隣人との会話もできない、明らかに重篤なコミュニケーション障害に陥っていたことは自明である。ダーガーは視線も合わすことができず、会話も成立しない奇妙な人であった。また、ダーガーはよく独り言を言っていた。それも声帯模写のように複数の人の声で、あたかも人が大勢いるかと思うほどであり、ある隣人は「ダーガーほどお客の多い人はいない」とすら語っている。時に内容が聞き取れると、それはおそらく昼間、病院の掃除夫として勤務中にシスターに叱られた時の再演であったために、「うつぶん晴らし」だったのかも知れないと、ある隣人は語っている。その隣人はこれは口答えすることはできない施設の生活が染みついてしまったのかもしれないと同情的な見解も付け加えている。ダーガーは教会に毎日行き、聖体拝領を受けていた敬虔なクリスチャンであったことについての証言は一致している。ダーガーの生活は教会のミサに行くことで、規則正しく成り立っていたようであった。1917年以後、ダーガーは教会に何度も養子縁組を願い出たが、当然のことながら、却下された。子どもに関して、ダーガーは自伝で「私は幼い頃、子ども心に幼児を憎んでいた。兄弟もなく、ただ一人の妹を里子に出された恨みだらう。私は妹の顔も名前も知らない。だが、成長するにつれ変化して、世界中の何よりも幼児が好きになっていった」

と記している。しかし、隣人はダーガーが子どもに関心があるとはまったく思えなかったことを語っている。ダーガーの現実と空想の混乱に関して、ダーガーの大家であるアネサン・ラーナーの夫人であるキヨコは「時々、名乗っていたわ。ヘンリー・ダルガリアス」と。ブラジル生まれと言っていたけれど、出生証明書はシカゴとなっている。虚実が入り乱れて何が本当なのか分からないわ。」と語っている。ダーガーの自伝も最初の頁のみが事実であり、後半はまったく事実と異なることが指摘されている。これは作為的というより、ダーガー自身がしばしば現実と非現実を混乱することがあったことを示しているのかも知れない。

・精神医学的見解

1. DSM IV TR の診断基準⁶⁾

ダーガーの生育歴、隣人の証言から精神障害を患っていたことに異論はないであろう。ダーガーの精神症状をまとめると、1) 幼児期の発症 2) 幼児期から連続した会話を中心としたコミュニケーション困難 3) 周囲からの孤立癖 4) 知能は正常あるいはそれ以上 5) 強迫性 6) 声帯模写のような独り言 7) 脆弱な現実検討識といったことが列挙される。こうした症状はアスペルガー障害を疑わせる所見である。

現在、精神医学的診断はアメリカ精神医学協会によって提案されている診断基準に従うのが一般的である。DSM IV TR のアスペルガー障害の診断基準によれば、大きく社会相互作用の質的障害と制限された反復的で常同的な、行動、興味および活動のパターンに問題がある。

診断基準 A. 以下の少なくとも 2 つで示される、社会的相互作用の質的障害：1. 視線を合せること、表情、体の姿勢やジェスチャーなどの多くの非言語的行動を、社会的相互作用を統制するために使用することの著しい障害 2. 発達水準相応の友達関係を作れない 3. 喜びや興味または

達成したことを他人と分かち合うことを自発的に求めることがない（たとえば、関心あるものを見せたり、持ってきたり、示したりすることがない）

4. 社会的または情緒的な相互性の欠如である。ダーガーの人生、人柄はまさしくこの診断基準をすべて満たしている。

診断基準B. 以下の少なくとも1つで示されるような、制限された反復的で常同的な、行動、興味および活動のパターン：1. 1つ以上の常同的で制限された、程度や対象において異常な興味のパターンのとらわれ 2. 特定の機能的でない日課や儀式への明白に柔軟性のない執着 3. 常同的で反復的な運動の習癖（たとえば、手や指をひらひらさせたりねじったり、または体全体の複雑な運動）4. 物の一部への持続的なとらわれである。ダーガーの「非現実の王国で」は偶々、芸術作品として世間の脚光を浴びているが、本作品はダーガーの執拗な空想世界の表現へのこだわりであり、子どもの残虐な場面など異常な興味のパターンへのとらわれであり、診断基準Bも間違いなく満たしている。こうした見解から、ダーガーは臨症的にアスペルガー障害の診断基準を満たし、現代であればアスペルガー障害と診断されるであろう。

2. 成人のアスペルガー障害の診断

アスペルガー障害は従来、1943年にレオ・カナー⁷⁾が「自閉症」という疾患単位を提案して以来、児童精神医学の中心として論じられてきた。1980年代には、ロナ・ウィング⁸⁾を中心に英国で大規模な疫学調査が成され、典型的な症状をすべて満たさない「非定型自閉症」の存在がクローズアップされた。その結果、当時、英語圏では忘れ去られていたウィーン大学のアスペルガーの論文が注目された。アスペルガー^{9), 10)}は1944年にカナーの論文とまったく関連なく、「自閉的精神病質」を発表していた。両論文は基本的には小児統合失調症の可能性が背後にあったが、カナーとア

スペルガーの症例にはかなりの相違が存在している。アスペルガーの症例は知的障害が目立たず、対人コミュニケーションの障害が著しく、アスペルガーはこれが社会的孤立を招いている基本的障害であると判断した。ウイング等はこのアスペルガーの症例をカナーの「自閉症」と健常児の中間に位置させ、自閉性障害は連続するスペクトラムとして存在するものと見なして、「自閉スペクトラム」という、自閉症の概念の広範化を行なった。このウイングの提案は全世界的に受け入れられるものとなったが、一般精神科の臨床実践では過剰診断という弊害も巻き起こしている。

さらに、自閉スペクトラムの概念の創案によって成人のアスペルガー障害にも関心が注がれるようになった。アスペルガーは自閉傾向が芸術や科学の分野では稀ながら成功の重要な要素になると論じ、光明を与えている。こうした観点から、アスペルガー障害の才能、創造性への論文、著書が発表されるようになった。その中で代表的な著書はイアン ジェームズ (Ioan James)¹¹⁾ の「アスペルガーの偉人たち (Asperger's Syndrome And High Achievement: Some Very Remarkable People)」、マイケル・フィッツジェラルド (Michael Fitzgerald)¹²⁾ の「アスペルガー症候群の天才たち——自閉症と創造性 (The Genesis Of Artistic Creativity: Asperger's Syndrome And The Arts)」である。

ジェームスは自らもアスペルガー障害であるという診断を受けている数学者であり、その著書の中で20名のアスペルガー障害と思われる偉人を抽出し、論議を行ない、成人のアスペルガー障害の診断基準として 1) 社会的能力の欠如 2) 狭い範囲の関心への専心 3) 反復的な日常生活 4) 話し言葉と言語の奇妙さ 5) 非言語的コミュニケーションに関する問題 6) 運動の不器用さを挙げている。ジェームスは本書が厳密な意味でアスペルガー障害であったかどうかを診断するものではないと注釈している。確かに、本書に挙げられた20名の中の数名、例えばゴッホやグール

ドについての記述はアスペルガー障害であるという説得力に欠け、過剰診断という側面も見出せるようである。しかし、奇人、変人などと称せられた芸術家等の心の中にアスペルガー的な心性といったものを部分的に見出すことは、その創造的な側面を照らすことになり、今後の展開が期待される領域といっても良いのかもしれない。

ダーガーは一生を数ヶ所の病院の掃除夫として勤務し、朝夕の礼拝、新聞の切り貼り、そして睡眠時間を惜しんで小説の執筆や絵画の製作を行っていた。大家のアネサンのみが辛うじてコミュニケーションが可能であったが、他の近隣の人々には言語、非言語的なコミュニケーションは不能であった。おそらくダーガーは作業能力が乏しかったため、しばしば病院のシスターに叱られており、その場面を毎晩のように再演していたのだと思われる。以上のことを考慮すると、ダーガーはジェームスの診断基準をすべて満たしていたと考えられる。以上の検証から、ダーガーが臨床的には狭義のアスペルガー障害である可能性が著しく高いと考えられる。

・精神分析的見解

精神医学的診断は精神障害をカテゴリー化するためのものであり、個々の心的世界について言及していない。操作的診断基準である DSM IV TR は症状の有無に関してのみに焦点が当てられ、その症状形成の背後にある力動的視点を一切、加味していない。ダーガーの心的世界を考察するにあたり、精神分析的観点から論じることで、ダーガーの心的世界を明らかにし、考察する。

英国の精神分析家であるフランセス・タスティン (Frances Tustin)¹³⁾ はアスペルガー障害を含む自閉症の精神分析に生涯を捧げた。タスティンは精神分析臨床という実践に基盤を置いた経験から、自閉症児が母親からの分離の感覚をトラウマとして感じ、必死に母子一体化の世界に執着する

ものと考えた。そのために、自己と他者の区別という「ころ」の基本的機能は存在せず、自己の世界が全世界であると感じている。重篤な自閉症児はこの世界に完全に呑み込まれており、他者との分離感がないことから、コミュニケーションの必要はなくなり、言語の発達も全く認められないこともある。また、言語や知的機能が発達した自閉症児・者にもこうした心性は残存し、自分の意思を表現することはできるが、他者の意思や気持ちを理解することができず、共感性が築かれぬ結果となる。さらに、分離感の確立できていない自閉症児は、個としての存在感覚が完全に失われる結果、同一性の母体が消失し、無と無意味の状態に落ちて行く逃げようもない不安を感じる。存在できないというこの根本的な体験の不安は、ブラックホール、底なし地獄、空虚として表現される。このタスティンの自閉症の心的世界への精神分析的な見解は、タスティンの後継者である欧米諸国の精神分析家¹²⁾によってより洗練された。

こうした心性を基盤とした自閉症児の心的発達、乳幼児期からの母親を含めた対人関係コミュニケーションが乏しいために、攻撃性は十分に洗練される機会がない。メラニー・クライン (Melanie Klein)¹⁴⁾は心的発達に関してフロイト¹⁵⁾の心的二元論に従って論考を展開した。生後間もない乳児は死の本能の派生物である攻撃性を母親に投影し、母親はそれを包容することによって乳児に取り入れ可能な攻撃性の質的な緩和を行い、母子関係の基盤が形成されるとした。例えば、乳児は授乳という生理現象を介した関係で吸う力、噛む力などの強弱の程度を母親の反応から知り、それを調整する。こうした相互関係によって、乳児は自らの攻撃性を知り、攻撃性を洗練化することを学ぶ機会になる。しかし、成人になっても乳幼児的な攻撃性が残存するということが、自閉症者に時に認められることがある。乳児期の攻撃性が成人の身体的能力で表現されると、それは時に猟奇的な事件として現実化することすらありうる。次に、同一性の基盤のなさ

は、自我同一性だけでなく、性に関する発達にも影響を与える。

フロイト¹⁶⁾は幼児期の健康な発達において、子どもはさまざまな性倒錯傾向を有し、多型倒錯的であることを論じた。性欲は成長するに従って、幼児性欲から異性愛に向かい性器が性欲の中心である性器期という最終段階に発達するとした。しかし、自閉症者には、時に幼児性欲の特徴である多型倒錯的要素が発達することなく、そのまま残存することある。多型倒錯的要素が残存すれば、それは正常でない性的行為に性的満足感を感じることであり、性的倒錯 (DSM IV TR では性的倒錯という用語でなく「パラフィリア (Paraphilia)」が採用されている) の展開に関連すると考えられる。それは性同一性障害、フェティシズム、小児愛、露出症などの性的倒錯の症状を意味している。

つまり、自閉症児・者にとってのコミュニケーション障害とは乳幼児期の情緒的相互関係を享受することができず、そのために時に攻撃性や幼児性欲の発達化が為されず、すべての同一性の確立が阻害され、乳幼児的心性を持ちながら時に成長しなければならないことを意味している。アスペルガー障害では、知的発達は何れも正常であり、あるいは時に秀でているものの、心的世界のみが乳幼児心性に留まることになる。当然のことながら、ここに生じる欲求不満やストレスへの耐性は乏しく、発達過程で身に付けられていくはずの抑圧などの防衛機制は作動していないために、些細な不安にも耐えることができないこともある。こうしたところの発達不全、あるいは発達停止した心性を、本論では「自閉症心性」(表参照)として提案し、議論を展開したい。但し、留意しなければならないのは、自閉症児・者の心的世界は画一的なものでなく、パーソナリティの基盤となる気質、養育環境などの影響を受け、それぞれの心的世界の発達は大きく異なるということである。

なお、メルツァー (Donald Meltzer)¹⁷⁾は自閉症児の精神分析研究から

ポスト自閉症心性 (post autistic mentality) を論じている。そこで、メルツァーは固執性と心的次元論による自閉症の心の発達の歪みとしての心的後遺症に関して記している。それに対して、本論の自閉症心性は攻撃性の発達不全あるいは停止という観点から論じている。

表：「自閉症心性」

<p>【自閉症心性の起源】 母子の心理的分離への抵抗・一体化</p>	<p>【自閉症児・者の症状】 情緒的交流の欠落・貧困</p>
	<p>コミュニケーション障害 (言語・非言語的障害)</p>
	<p>【自閉症のこころの病的発達】 自我同一性の混乱 幼児性欲 (多型倒錯的傾向) の残存・変異 乳幼児空想としての攻撃性の残存・変異 ストレス耐性・不安の閾値の低さ</p>

ダーガーの「非現実の王国で」の作品の特徴を、1) 技法 2) 物語の内容と展開 3) ヴィヴィアン・ガールズの描写 4) 嬰兒殺戮の描写に焦点を当てて、自閉症心性との関連によって考察する。

1) 技法

ダーガーの絵画の技法はマグレガーの著作³⁾に記載されているように、幾多の変遷の結果、コラージュ=ドローイング技法によって完成した。コラージュ=ドローイングによって、ダーガーの技法は格段の進歩を遂げたが、基本的には自分のお気に入りの新聞の切り抜きからトレースを行ない、時に高価な出費を惜しまずそれを拡大し、好みの他の素材を貼り付けることによって、自分のイメージを描写することであった。この技法の特徴は、自分でイメージを実際に描くことなく、すべてを他者からの借用に依拠し

たことである。つまり、これらの技法はある意味、他者からの借用あるいは模倣に過ぎず、コピーに終始するだけのことである。これだけを取り上げれば、ここに真の創造性を見出すことはできない。他者の模倣行為に関して、メルツァー¹⁸⁾は自閉症児・者にはしばしばこうした手段が用いられることに関して、附着同一化という概念を提案している。つまり、多くの自閉症児・者は想像力が乏しく心的表象としてのイメージを抱き難く、想像的な絵を描いたり、自分のイメージを表出することが苦手であることは良く知られている。そのために、こうした子どもたちは絵本やカードの模写に終始する機会に、しばしば遭遇する。ダーガーがなぜ絵画を描こうと決心したのか知る由もないが、少女の新聞の漫画、挿絵がダーガーのここを打ったことは確実なようである。ダーガーの古新聞、雑誌等の膨大な収集の大半はこうした少女たちのものであった。これを自分自身のものにするために、必死に創意工夫した技法の結果がダーガーの絵画であったのであろう。ダーガーの絵画には自らの筆による創造性は見当たらないが、能力的に限られた想像性で自らのイメージを創造的に表現したいという必死さが表出されており、それが私たちにここに大きな衝撃を与えるのかも知れない。

2) 物語の内容と展開

「非現実の王国で」のストーリーは、子ども奴隷制を持つ軍事国家である「グランデリニア」と、「アビエニア」とよばれるカソリック国家との戦争であり、その顛末は確定されていない。このストーリーの基本はダーガーが幼児期から執拗な関心を持った南北戦争に依拠している。さらに、イリノイの養護施設から脱走後の翌年から書き出されていること、この登場人物にダーガーが強制的に収容された養護施設の職員や子どもの名前が頻出していることから、ダーガーは自分自身のトラウマの整理のためにこの物語を書き始めたと推測される。しかし、その小説の内容は、「グラン

デリニア」と「アドエニア」の戦争の反復に過ぎず、物語としての起承転結の筋道を見出すことが困難である。これはダーガーのトラウマは反復強迫的に再現したものの未だに癒されることなく、セピア色の思い出になることがなかったことを示唆しているようである。自閉症心性のひとつの特徴は不安の処理機能の欠落あるいは脆弱性であり、抑圧だけでなく、投影同一化、否認などの原始的な防衛すら作動しないことにある。そこにあるのは、ただトラウマ体験の視覚的な反復強迫である。ダーガーにとっても、どれだけ恨み辛みを語り、描いても尽きることがなく、その物語は世界最長の小説と言われるまでの長編になってしまったかのようである。また、顛末が二通りあることも、ダーガーのトラウマの経験の整理するまでに至っていないことを示唆している。自閉症、あるいはアスペルガー障害の青年との臨床的な関わりで「いじめ」や「虐待」がそうした青年の現在の不適応行動に関与していることがしばしば認められる。ある中年の自閉症者は20年以上前に遭遇した暴力事件に怯え、未だに社会適応できないひとつの原因となっている。また、この見解に関しては、いくつかの学術的な研究論文¹⁹⁾が発表され、こうした臨床所見を支持している。

3) ヴィヴィアン・ガールズの描写

ヴィヴィアン・ガールズのペニスについては、多くの人の関心が寄せられている。映画では、このペニスに関して質問が成され、出演者が冗談交じりにそれぞれの意見を述べている。しかしながら、これは重要な問題である。なぜダーガーはヴィヴィアン・ガールズにペニスを描いたのか。自閉症心性での同一性の問題は青年期の同一性拡散などと異なり、存在そのものの問題であり、すべての同一性に関係する。幼児は生物学的な性器の差異にかなり早期から気づき、身体感覚も早期から発達されるとされている。しかし、自閉症児では身体感覚の発達も遅れ、自分の身体という感覚が乏しい。未だに母親と一体化しているという無意識的空想に耽っている

ことが、身体感覚の乏しさに影響を与えているのであろう。ダーガーが解剖学的な男女の差異に関して現実的に知っていたのかどうか、施設での集団生活からすれば、その差異を知っていたと考えることが妥当であろう。最愛のヴィヴィアン・ガールズは、ダーガーにとって母子一体化の空想の表現として母親を表象したものと見なすことを提案したい。本論を書く際に、調べた限りではダーガーの母親への情緒的な記述はない。これは母親を意識していないわけではなく、逆に一体化しているからこそ言及する対象とはならないのであろう。ヴィヴィアン・ガールズのペニスはダーガーと母親の母子一体化の証であり、それはダーガー自身の性同一性の混乱の証ともなっていると推測することができる。

さらに、より詳細に精神分析的見地からダーガーの心的世界を考察すれば、アウゼル²⁰⁾等の精神分析家は乳首 乳房は一体化したバイセクシャルな対象であり、乳首は硬く男性的構成物、乳房は柔らかく女性的構成物を表象していることから、この分離と統合の関係の理解の困難を自閉症の性の混乱の基盤であると考えた。こうした自閉症心性の本質的な問題から勘案すれば、混乱した乳房 乳首の表象として、ヴィヴィアン・ガールズのペニスが描かれているという仮説も成り立つかもしれない。実際に、自閉症児・者は健全な異性関係を築くことはしばしば困難であり、カナーの報告の13例の症例もすべて独身のまま生涯を閉じた。一部のアスペルガー障害などの高機能自閉症児・者は健全な異性愛を形成することも十分に可能であるが、同性愛の報告も認められている。アスペルガー障害の天才として著名なウィットゲンシュタインは同性愛傾向に基づく行動に関して、明らかな証言等がある¹²⁾。ダーガーにはウィットゲンシュタインほどの社会性はなく、対人関係はまったくなかった点からすれば、ダーガーは成人としての性的関心はなく、さらには性差を認識することすら実感していなかったと考えることもできるであろう。

4) 嬰兒殺戮の描写

嬰兒殺戮のモデルの由来は、ヘロデ大王がイエスの誕生を恐れ、ベツレヘムの2歳以下の男児をすべて殺したという聖書の記載ではないかと連想される。この宗教逸話にダーガーのアイデアの源があることに相違ないであろう。しかしダーガーの嬰兒殺戮の枚数の多さ、内臓の正確な描写と残忍性、そして残酷な処刑風景など、そこに描写されたものは常識の域を超えている。ダーガーは小児殺戮の絵画を描くことに没頭していたのであろうが、そこには性的興奮、快感すら垣間見ることができるよう感じられる。さらに、仮説を展開すれば、ダーガーはこうした物語の記述、絵画を作成しながら、性的興奮を感じ、自然な生理現象としての排泄が成されたのではないだろうか。これに反して、ダーガーが教会に再三、養子縁組を望んでいたことを考慮に入れると事態は更なる混乱の坩堝と化してしまう。ダーガーの子どもへの思いは、一方では残忍な攻撃性の発露として存在し、他方では限りなく愛おしい存在として布置されていた。この両価的な態度は小児愛とされる異常性愛に見出される精神病理である。

ダーガーの生育歴にもあるように、自閉症児、特にアスペルガー障害児は同世代の子どもと遊ぶことが最も苦手であり、大人とはそれなりのコミュニケーションが可能である。これはアスペルガー障害児にとって、同世代の子どもは自分の領域に土足で踏み入る危険な存在として認識され、迫害的な対象である。ダーガーの子どもへの敵意の源泉は自らが受けた虐めなどのトラウマを処理できないという心的機能の障害によるが、それに対する怒りの表現は幼児期から洗練されることのない生々しい攻撃性に由来すると思われる。

その一方の子どもへの恋慕に関して、ダーガー自身は名前も顔も知らない妹に関係していることを語っている。ダーガーの母親は妹の出産とともに亡くなっているが、ダーガーの妹への言及は自他未分化な自閉症心性に

おいては、妹 = 母親 = 自分という自己愛的な構図の中にその原点を見出すことができるかもしれない。ダーガーの養子縁組の希望は、妹という喪失した対象を養子という代理者に置き換えることによって、その妹の具体的な復活を目指す行動と見なすことができるであろう。ダーガーの子どもへの愛憎一体化した偏愛的傾向は著明であり、こうした心性は小児愛に認められるものと判断できるであろう。

ダーガーの性的倒錯に関して論じたが、これはダーガーの空想の所産であり、現実に行なわれていないゆえに芸術として成立したことを付記したい。

．アスペルガー障害の芸術的創造性

アスペルガー障害の提唱者であるハンス・アスペルガー⁹⁾は高度な知的機能のある人にとって、予後は良好であり、自閉傾向は芸術や科学の分野で成功を収める重要な要素になると考えた。つまり、強靱な忍耐力、完璧主義、抽象的思考能力があり、他者や社会からの評価に対して無関心であるために、アスペルガー障害の人々は自らの世界を展開できるものとして、アスペルガーの見解を咀嚼すれば、知的に高度なアスペルガー障害の人々は対人関係や社会での評価を気にすることなく、自らの関心に専心できる能力を備えているということになる。ここで問題となるのは関心とは、主にどのような関心ということであろうか。アスペルガー障害の天才と評されている人々は主に科学、芸術領域から選択されているが、物理学者、哲学者、音楽家といった領域に多い。この意味していることは、対人関係に無関心であるアスペルガー障害の天才は対人関係上の雑事を超えて、絶対者あるいは真理という領域に一気に足を踏み入れることができるのではないだろうか。例えば、ダーガーは気候や気象異常に並々ならない関心を抱き、何年にも及び詳細な天候記録を記している。これはダーガーの自

然という絶対者に対する関心である。

アスペルガーはアスペルガー障害の芸術や科学に適した大枠な性格について語っているが、詳細な精神病理に関して考察しているわけではない。精神分析の領域では、芸術に関する考察は多数あるが、ここではフロイトとクライン派の見解を紹介するに留める。フロイトは芸術に関して、作家は性的エネルギーを芸術作品の中で非性愛化して、そこに普遍性が見出された時に芸術作品としての評価を得ることと記している。さらに、こうした性的エネルギーの普遍的な芸術作品への転化を昇華として記した。クライン派²¹⁾は乳幼児と乳房の関係によって、子どものこころの発達を論じている。乳児は生後間もなく、授乳する乳房と授乳しない乳房というスプリットしたふたつの乳房が存在していると想像しているが（妄想分裂ポジション）、これがひとつの乳房であることに気づくこと（抑うつポジション）が重要なこころの発達であると考えた。この抑うつポジションで、乳幼児は自らの攻撃性で破壊した乳房への罪悪感、修復への空想世界の願望が創造性に関係すると考えた。しかし、ダーガーのアスペルガー障害という精神医学診断、心的世界の考察から、ダーガーの個人的な性的エネルギーは子どもに向かい、成人のような異性愛からの脱性愛化、昇華といった段階になく、トラウマの泥沼に呪縛されている心的世界にあっては、抑うつポジションでの修復というほど心的発達を成していないのは明らかである。

では、ダーガーの芸術性はどのようなものであるのだろうか。ダーガーの日常生活から勘案するに、ダーガーの最大の関心は「神」の存在だったに違いない。敬虔なクリスチャンであるダーガーは、人間関係を考慮する必要のない「神」との交流によってのみ生き続けることができた。しかし、時にダーガーはその「神」の存在について自問自答し、写真が無くなった時には、異教徒の如く神への冒流行為も行った。

ダーガーの作品は神が絶対者であり、真実であるというキリスト教の命

題への自問自答、さらにその存在の有無を問う信仰に関する葛藤に由来すると考えることもできるであろう。ダーガーの物語は神と悪魔の戦いであり、神が勝つのか、悪魔が勝つのか、その顛末は流動的である。これが真の信仰に悩む迷える子羊の姿とも言えるかもしれない。ビオン (Wilfred, R. Bion)²²⁾は真実に関して、真実は「考える人のない思考」であり、未だに考えられていない真の思考や観念であるとした。ダーガーを始めとしてアスペルガー障害者には「自閉症心性」として記述した自我同一性に問題がある。つまり、自分という自分は存在せず、個人が確立されていない。ビオンの真意と異なるが、正しく真実の探求は「考える人のない思考」であり、自己の存在そのものにも確信のないアスペルガー障害者に適したことであるかもしれない。

芸術に関して、メルツァー²³⁾は誕生直後の新生児は母親の乳房の絶対性に魅惑されると記している。この時、乳房は審美的対象として新生児を魅惑するが、母親のわずかな表情の陰りにより、その乳房から滑り落ちる瞬間に芸術の起源はあると記述している。「自閉症心性」のトラウマは母親からの分離に関するものであり、それはメルツァーが記述している滑り落ちる瞬間の体験である。そして、自閉症児・者は、この瞬間を反復的に往來しているものと考えられる。ダーガーは絶対者としての乳房である神の存在を信じる、あるいは不信感に苛まれる往來の瞬間に関して表現していると考えられる。こうした観点から、ダーガーの芸術は絶対者の存在に関して熟考を重ねた哲学的思考の産物であったと結論できる。

一般的に、アスペルガー障害児・者は常に変化する人間関係の関心がなく、不変かつ一定な「もの」との関係に関心を示す。例えば、自閉症児の中には電車のおもちゃや路線図への飽くなき固執と驚異の記憶力を示す子どもたちがいるが、硬い電車のおもちゃはある意味、安定感に満ちたものであり、こうした子どもたちに安心を与えているようである。こうした固

執的な関心が時に、ダーガーのように神だけでなく、物理、哲学、芸術などで真理に向かうとすれば、その執拗な執着心と飽くなき努力によって、ピオンの「考える人のない思考」となり、真理の探究者として最適な人と成ることができると思われる。

付記：

1. 本論文はダーガーの作品の芸術性などについて論じたわけではなく、ダーガーの精神医学的診断、それに伴う精神分析的考察によってダーガーの作品を解釈するための試論である。また、本論文で記した「自閉症心性」は病理性の高いものであり、すべての自閉症児・者に見出せるものではなく、自閉症の病的な心的発達 の所以と見なして欲しい。
2. 本論でアスペルガー障害、自閉症という用語を使用しているが、アスペルガー障害は DSM IV TR に準じて用いているが、その上位概念として自閉症という用語を使用している。DSM IV TR の広汎性発達障害と等価概念として使用した。
3. 本論文では「自閉症児・者」という用語を記載した。英語圏では「autistic children」より、「children with autism」という表記が一般的になりつつあるが、本論文での主旨も個人のパーソナリティの一部あるいは別個に存在する自閉症の病的な心性を論じたもので、まさに「children with autism」が適当である。しかし、紙面の都合上、「自閉症のある子ども・成人」という表現を使用しなかったことを付記する。
4. 本論は独立行政法人学術振興会の科研費（20530642）の助成を得た研究「広汎性発達障害児を対象とした精神分析的アプローチによる治療効果の判定について」の一部である。

[引用・参考文献]

- 1) 服部正 (2003) : アウトサイダー・アート (光文社新書). 光文社
- 2) Yu, J. (2005) : In the Realms of the Unreal. Fox Lorber (「非現実の王国でヘンリー・ダーガーの謎」 [DVD]. ジェネオン エンタテインメント (2008))
- 3) MacGregor, J.M. (1996) : Henry Darger - In the Realms of the Unreal. Fondazione Galleria Gottardo (小出由紀子 (翻訳)「ヘンリー・ダーガー 非現実の王国で」 作品社 (2000))
- 4) MacGregor, J.M. (1989) : Discovery of the Art of the Insane. Princeton Univ

Press.

- 5) 小出由紀子・都築響一 (2007) : HENRY DARGER'S ROOM. IMPERIAL PRESS
- 6) American Psychiatric Association (2000) : Quick Reference to the Diagnostic Criteria from DSM IV TR American Psychiatric Pub. (高橋三郎他 (翻訳) 「DSM IV TR 精神疾患の分類と診断の手引」 医学書院 (2003))
- 7) Kanner, L. (1943) : Autistic Disturbance of Affect Contact. Nervous Child 2 217 - 50 (十亀史郎他訳「幼児自閉症の研究」黎明書房 (2001))
- 8) Lorna Wing (1997) : The Autistic Spectrum : A Guide for Parents & Professionals Constable. (久保絃章他訳「自閉症スペクトル——親と専門家のためのガイドブック」 東京書籍 (1998))
- 9) Asperger, H. (1944) : 'Autistischen Psychopathen' im Kindesalter. Archiv für Psychiatrie und Nervenkrankheiten, 117 76 - 136 (詫摩武元訳「小児の自閉的精神病質 児童青年精神医学とその近接領域」 34(2)180 - 197・34(3)282 - 301)
- 10) Frith, U. ed (1997) : Autism and Asperger Syndrome. Cambridge University Press (富田真紀訳「自閉症とアスペルガー症候群」 東京書籍 (1996))
- 11) James, I. (2006) : Asperger's Syndrome And High Achievement : Some Very Remarkable People. Jessica Kingsley Pub. (草雜ゆり訳「アスペルガーの偉人たち」 スペクトラム出版社 (2007))
- 12) Fitzgerald, M. (2005) : The Genesis of Artistic Creativity : Asperger's Syndrome and the Arts. Jessica Kingsley Pub. (石坂好樹訳「アスペルガー症候群の天才たち—自閉症と創造性」 星和書店 (2008))
- 13) Spensley, S. (1995) : Frances Tustin. Routledge (井原成男他訳, 木部則雄解題「タスティン入門—自閉症の精神分析的探究」 岩崎学術出版社 (2003))
- 14) Klein, M. (1995) : Envy and Gratitude. In, The Writings of Melanie Klein Vol.3.. Hogarth Press (松本善男訳「メラニー・クライン著作集5 羨望と感謝」 誠心書房 (1985))
- 15) Freud, S. (1920) : Beyond the Pleasure principle. SE. XVIII (小此木啓吾訳「フロイト著作集6 快感原則の彼岸」 人文書院 (1970))
- 16) Freud, S. (1923) : The Ego and the Id. SEX IX (小此木啓吾訳「自我とエス」 フロイト著作集6 人文書院)
- 17) Meltzer, D., Bremner, J., Hoxter, S., Waddel, I. (1975) : Explorations in Autism, Clunie Press

- 18) Cassese, S. F. (2003) : Introduction to the Work of Donald Meltzer. Karnac Books (木部 則雄他訳 入門メルツァーの精神分析論考—フロイト・クライン・ピオンからの系譜 岩崎学術出版社 (2005))
- 19) 浅井朋子他 (2007) : 高機能広汎性発達障害の不適応行動に影響を及ぼす要因についての検討. 小児の精神と神経 47(2)77 - 87
- 20) Houzel, D., Rhode, M. eds (2006) : Invisible Boundaries : Psychosis and Autism in Children and Adolescents. Karnac Books (木部 則雄他監訳「自閉症の精神病への展開」明石書店 (2009))
- 21) Hanna Segal (1991) : Dream, Phantasy and Art. Routledge (新宮一成 (翻訳) 夢・幻想・芸術——象徴作用の精神分析理論 金剛出版 (1994))
- 22) Bion, W. (1970) : Attention and Interpretation. Maresfield (福本修・平井正三訳「精神分析の方法 - セブン・サーヴァンツ」法政大学出版 (2000))
- 23) Gosso, S. ed (2004) : Psychoanalysis and Art Kleinian Perspective. Karnac Books

